「神様から任された役目」

エフェソの信徒への手紙　３：１－１３
マルコによる福音書　　９：５０

２０２３年8月２８日
野村　友美 師

＜私たちの担う役目＞

　あなたの役目は何ですか？なんていきなり聞かれたら、困ってしまいますよね。
たぶん私も含めて、答え切れる人はいないだろうと思います。
私たちがそれぞれ担っている役目って、時と場合によっていろいろと変わるものですから。
例えば、家族のお父さん、お母さん、子どもとしての役目。仕事で担当している役目や、学校での役目。趣味の集まりとか、友達との間での役目。教会での役目。そんな風に、誰の目にもはっきりわかる役目もあれば、他の人からも自分でもなかなか意識しにくい、そんな役目だってあります。
何かをしなくても、ただその場所に居ることが、大切な役目になる時もあるでしょう。
通りすがりの状況の中で担う、１回限りの役目もあるかもしれません。
何にしても「自分には役目がある」と思えることは、多くの人にとって、生きる力になるんじゃないでしょうか。子どもたちが大好きなアンパンマンの歌にも、こんな言葉が歌われています。
「なんのために生まれて、なにをして生きるのか。
　答えられないなんて、そんなのはいやだ！」
改めて聴くとドキッとさせられる歌ですよね。
神様は私たち人間を、それぞれ誰とも違うオリジナルとして形作って、命をお与えになっています。一人一人の違いに込められた神様の思いや願い、任せたい役目がそこにあるからだと思います。
　私たちそれぞれに、神様がどんな役目をお与えになっているのか。完全に知っている人は誰もいません。ただ、聖書の言葉を通して、祈りを通して、日常の出来事や誰かとの関係を通して、私たちは神様から任された自分の役目を知らされる時があります。
「あなたにこの役目を任せる」と神様から手渡される時に、その役目を果たすために必要なものもまた神様が手渡してくださることを、私たちは知らされる。そのことを今日の聖書の言葉で、使徒パウロはエフェソの教会と、この手紙を読むすべての教会に向かって語っています。
パウロ自身の役目と、教会が神様から任されている役目について。
そして、その役目がそれぞれにもたらすものについて、パウロは励ましと希望を込めて、私たちに伝えているのです。

＜パウロの役目と苦難＞

　神様がパウロにお与えになった役目は、異邦人たち、つまりイスラエル民族以外の人たちにイエス様の福音を伝えることでした。
ユダヤ人でも異邦人でも、神様がお創りになったすべての人が、イエス様によって罪から救われて、神の国を生きる命をイエス様から差し出されて

いる。神様のこともお互いのことも愛しきれない、そんな罪から解放されて、誰もがイエス様を通して、神様ともお互いとも結び合わされて本当の平和を生きることができる。
この平和の知らせ、福音をあなたたちにも伝える役目を私は神様から任されている者です。
そう言って、パウロは今日の箇所のはじめに改めて自己紹介をしています。
かつて「サウロ」という名前だったパウロは、元々はファリサイ派と呼ばれる熱心なユダヤ教徒で、イエス様を信じる人たちを迫害する側だったんです。ファリサイ派の人たちは、律法を厳しく守って生活することこそ神様に喜ばれる生き方だと信じていました。
イエス様が十字架にかかられる前、イスラエルのあちこちで活動しておられた時には、時々このファリサイ派の人たちと衝突していたことを、福音書は伝えています。
ファリサイ派の人たちは、時に「律法を守る」という正しさを大事にし過ぎてしまって、いろんな事情で律法を守れなかった人を「不信仰な罪人だ」と決めつけてしまうこともあったからです。
神様に対して正しく生きようとするのは、もちろん大切なことです。それでも、神様の愛と憐れみよりも大切なことは、他にはない。
そう人々に教えて、ご自分でも実行しておられたイエス様は、多くのファリサイ派の人たちにとっては、律法を無視する危険人物でした。
ですから、その危険人物のイエス様を、神様から遣わされた約束の救い主だと信じるキリスト教徒たちも、彼らにとっては危険思想の異端者たちだったんです。あのキリスト教徒たちは、十字架刑で死んだイエスが復活して天に昇って、今も生きて神様と一緒にいる、なんて主張している。
せっかく危険なイエスがいなくなったのに、
その弟子たちを放っておいたら、間違った信仰がますます広まってしまう。そう考えたある人たちが、やがてイスラエルの指導者たちを煽って
キリスト教徒を迫害し始めました。
真面目で熱心なファリサイ派だったパウロも、イエス様こそ救い主だと伝える人たちを脅したり、時には殺してしまうために片っ端から捕まえて回っていました。
そんなパウロにある時イエス様が語りかけて、それまでとは真逆の役目をパウロにお与えになったんです。回る心、と書いて「パウロの回心」とよく言われる出来事ですが、パウロの価値観も生きる世界も、まさにくるりと逆転させられました。
そうやって与えられた自分の役目を、パウロは今日の手紙の中で「恵み」と呼んでいます。
自分が思う正しさに一直線だった時よりも、イエス様に逆転させられた今の自分を「神様からの恵み」だと感じている。
私たちのすべてを超えて働かれる神様が、思いがけない役目を「恵み」として与えて、私を生かしてくださる。このことをパウロは、実体験として知っていたんです。
だからどんな状況に置かれても、どんな問題にぶ

つかっても、そこから神様の思いが表されていく、とパウロは確信していました。
神様の愛と正しさは、どんなことも乗り越えて実現される、とパウロは信頼していました。
だから彼は、苦難だらけの自分の役目をそれでもこう表現します。神様が私にお与えになった「恵み」と。

＜教会の役目は何か＞

パウロに任された役目を、神様が果たさせてくださる。それと同じように、あなたたち教会にも任された役目があるんだ、とパウロは語っています。

「こうして、いろいろの働きをする神の知恵は、今や教会によって天上の支配や権威に知らされるようになったのですが、これは神がわたしたちの主キリスト･イエスによって実現された永遠の計画に沿うものです。
わたしたちは主キリストに結ばれており、キリストに対する信仰により、確信をもって、大胆に神に近づくことができます。」（エフェソ 3:10-13）

いろいろの働きをする神の知恵、とここでパウロが呼ぶもの。神様の思い、神様の愛と憐れみ、神様の正しさと、それを必ず実現される神様の力を、人々を上から支配している力や権威に対して告げ知らせる。それが教会の役目だ、とパウロは宣言しています。
そしてこの役目は、神様が御子イエス様によって実現された永遠の計画、すべての人が救われて神様と共に生きる「神の国」に沿うものだと教えています。
神様から任された役目を担う教会を通して、神の国はこの世界に少しずつ、でも確実に今も広がり続けているんです。
神様から教会に与えられた役目。
それは、かつてイエス様が弟子たちの役目について、塩に譬えて話された言葉とつながるものです。

「塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身のうちに塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」（マルコ9:50）

当時の人々にとって、塩はいろんな働きをしてくれる大事なものでした。食料が腐らないで長持ちするように雑菌から守ったり、料理を美味しく味付けしたり、時にはランプの油に入れて、光を明るくするためにも使われたそうです。
そんな塩のように、「神様の味」を自分自身の中に持ちなさい、とイエス様は弟子たちに言っておられます。
自分に都合が良い方へ、好みに合う方へ、自分の立場を守れる方へ、いつの間にか流れていってしまわないように、「神様の正しさ」とは何かを、自分自身に問いかけ続けなさい。
命を与えたすべての人を神様が愛して尊重しておられる、そのことを忘れないで、希望の輝きを持ち続けなさい。
あなたたちと関わりを持つ人々が、その関係を安

心して喜べるように、神様の愛に従って、神の国の平和を生きなさい。
イエス様が語られたこの塩として役目が、イエス様の弟子たちの群れ、教会に与えられている役目です。
私たちが生きているこの世界は、人が人を支配する力と権威に覆われています。同じ人間同士が、お互いに格差や優劣をつけて差別する。
弱い立場の人は無視され、あるいは犠牲になって、強い者が利益を得る。そういう味に馴染みきっているこの世界で、神様の愛と正しさを自分たちの中に持ち続けて、「神様の味」をさせ続ける塩であるように。
神の国の平和を生きて、この平和にすべての人を招く群れであるように。
それが、私たちが今日も呼び集められて、一緒に形作っているこの「教会」という共同体に任されている役目です。
神様の思い、神様の愛と憐れみ、神様の正しさと、それを必ず実現される神様の力を、この世界に告げ知らせるために。私たちと一緒におられる神様の霊、聖霊は今日も働かれます。
　最後に一つ、私の前任地の福岡教会で神様がなさった、素敵な出来事を紹介させてください。
ある時、１組のカップルが教会に訪ねてこられました。お二人はその日に入籍したところで、いろいろ事情があって結婚式は挙げないけど、せめて指輪の交換を教会でしたくて、入籍したその足で教会に来られた、という話でした。
どちらもクリスチャンではないし、福岡教会に来たこともなければ誰か知り合いがいるわけでもありませんでした。ただ通勤の途中でいつも「ああ、ここに教会があるんだな」と思いながら、教会の前の道を通っておられたんだそうです。
せっかく神様が招いてくださったのだからと、そのまま礼拝堂で結婚の宣誓と、ささやかな祝福の式をさせていただきました。
その式の後で、奥様になられた女性の方が、
「実は昔、他のところですが、教会に通っていたことがあるんです」と話してくださいました。
その言葉を聞いた時に、神様は何てすごいことをなさるのかと心が震えました。
神様は「結婚」という大きな人生の節目に、この女性を今度は人生の伴侶と一緒にもう一度、ご自分のもとに呼び戻されたんです。
二人が神様の前で結び合わされたという宣言を受けて、お互いへの愛と誠実な歩みを誓って、祝福を受けて送り出されるように、すべてのことを整えて、教会へと導いてくださったんです。
私たちの知恵や力がどんなに小さくても、弱くても頼りないとしても、教会は神様から「恵み」の役目を任せられた群れです。
この場所を通して、呼び集められた私たちを通して、神様は必ず神様の思いを、愛と憐れみと正しさを、神様の平和を実現されます。
だから神様がなさることに、神様から任せられた私たちの役目に期待しながら、新しい週もご一緒に歩んでいきましょう。お祈りいたします。